

# 『オールメイヤーの阿房宮』について

奥村透

『オールメイヤーの阿房宮』(Almayer's Folly, 1895)はコンラッド(Joseph Conrad)の処女作で、彼の一連のマレー物の一つである。この小説の舞台となっているのは、ボルネオの東岸のパンタイ河(Pantai)の河口から三、四十マイルさかのぼった所にあるサンバー(Sambir)というマレー人部落である。そこはパンタイ河の兩岸に昼なお暗い密林が生い茂り、川だけが交通の手段であって、原始の黒い魔力が人間の生活を重く圧迫し、人間を文明から隔てているような場所である。まず第一章の終りにおける雷雨のサンバーの描写を引用してみよう。

しかしニーナは明りを消し、ふたたびウェランダの手すりの方をふり向いた。彼女は腕を木の支柱にまわして立って、パンタイ河の流域を熱心に見つめていた。そして熱帯の夜のおしつける静けさの中に凝然と、彼女は稲妻の閃くたびに川の兩岸に並ぶ森が激しい疾風にたわみ、川の上流が叩かれて白く泡だち、黒い雲がちぎれて奇妙な形となり、揺れる木々の上を低く引きすってゆくのを見ることができた。彼女の周囲にはまだ静寂と平和があった。しかし彼女ははるか遠くに吹きつける風の咆哮、はげしい雨のしゅうしゅういう音、さかまく川の波のおし流す音を聞くことができた。轟く雷鳴と長く閃く稲

妻と共に、短いまっくらの闇を伴って、それは近くより近くへやって来た。嵐が川を分ける低い突出部に達した時、家全体は震え、雨はばたばたと音高くしゆるの皮の屋根を叩いた。雷は長くのびる轟音で咆え、たえ間ない稲妻が、跳びはねる水の喧噪、押し流されてゆく丸太、残忍で無慈悲な力の前にたむむ大きな木々を照らした。<sup>①</sup>

これは雷雨におそわれたサンバーの描写であるが、コンラッドの筆はこの原始に近い熱帯の土地の自然の恐怖を、あますところなく写しだしている。樹齡幾年ともしれぬ大木と大木がからまりあいもつれあつて昼なお暗い密林、熱帯の土地をおそうすさまじいスコールと雷雨、岩を噛み丸太を押しながす洪水。これらがこの小説の舞台をなすマレーの自然である。それは暗うつであり兇暴であり原始そのものであつて、人間の力の到底及ばぬ恐ろしい魔力を秘めている。ゲラード (Albert J. Guerard) はこうしたマレー的背景のもつ意義に着目し、これを「真にコンラッド的な闇<sup>②</sup>」と呼び、「しかしこれらさまざまの興味や主題の中で、最も周辺のものがたぶん最も成功を収めている。それはマレーの地方色とサンバーの描写と土着の心理への洞察である」と述べている。実際この小説においてこうしたマレー的背景の占める比重は大きく、それは背景以上のものと言つてよい。なぜならばこれから述べようとするオールメイヤーをめぐる悲劇は、こうしたマレーの自然と人間との、原始の心理と文明との闘いに外ならぬからである。ウォルポール (Hugh Walpole) が『オールメイヤーの阿房宮』のテーマは弱い人間の自然に対する闘いである<sup>③</sup>と指摘しているのは、この事を指すに外ならない。またシュワーツ (Daniel R. Schwarz) がサンバーを『闇の奥』(Heart of Darkness, 1899) のコンゴと比較して、「サンバーの川であるパンタイ河はコンゴの原型である。それが白人に与える先祖返り的な影響は、長く抑制され萎縮したみだらなエネルギーを引きだし、コンゴのクルツに対する影響を予知させる。……サンバーの熱帯の舞台は、死と破壊の過程によつて支配されているようにみえる。そして密林の抑制しがたい肥沃さは進化よりも退化に現われる」と述

べているのは適切である。コンゴの風土がクルツを墮落させるのと同様に、マレーの自然はオールメイヤーを墮落させるのである。

このサンバーのマレー人部落にただひとりオールメイヤーという中年のオランダ人が住んでいる。彼はこの部落に住む唯一の白人であるが、『島の流れ者』(An Outcast of the Islands, 1896)の主人公ウィレムズ(Willlems)と同様、白人のエゴイズムと物質主義の腐敗した世界の人間である。彼は自分では何ひとつせず、リンガード船長(Captain Lingard)が征服して自分の養女としたマレー娘と頼まれて結婚し、その間に生まれたひとり娘のニーナ(Nina)と自分のために、輝く未来を夢みて生きている。彼は航海に出ているリンガード船長がやがて巨万の財宝を得て帰還し、その金で自分とニーナがアムステルダムへ帰って、大邸宅に豪奢に暮すことを夢想してひたすら船長の帰りを待っているのだ。要するに彼は白人のエゴイズムと物質主義にこりかたまつた俗物なのである。彼がマレー人の女を妻としたのは、リンガード船長の富の約束との交換条件としてであり、妻に対してはなんら愛情らしいものをいだいていない。妻の方もオールメイヤーに対して嫌悪と敵意こそいだいておれ、なんら夫婦らしい感情をもっていない。彼は白人であり彼女は原本人であって、二人は理解しあうことのない対立的な夫婦なのだ。またオールメイヤーをとり巻くラカンバ(Lakamba)、アブダラ(Abdulla)、ババラッチ(Babalatch)などのマレー人やアラブ人も政治商業上の対立からオールメイヤーを敵視し、隙あらば彼を追放しようとする機会をうかがっている。すなわちここには白人対原本人、文明対原始の対立関係が見られるわけで、オールメイヤーはまったく孤独である。そんな中でオールメイヤーがただひとり人間らしい愛情をそそぎ、信頼しているのは混血の娘ニーナである。彼は俗物ではあるけれど、彼のニーナに対する愛情は疑うことのできない真実なものである。ゲラードは娘に対するオールメイヤーの感情を、「近親相姦的感情」<sup>⑤</sup>とさえきめつけている。

ニーナは文明人としての教養を身につけるため、リンガード船長によってシンガポールへ送られ、ヴィンク夫人 (Mrs. Vink) という白人の女性のもとで教育を受ける。しかしニーナがシンガポールで体験するのは、isolation と egotism に特徴づけられる白人の文明世界、彼女が後に "her days of restraint, of sorrow, and anger"<sup>⑦</sup>と呼んでいる世界であって、彼女はこれに同化することができない。シンガポールから帰って両親と暮すようになった彼女は、母の影響で次第に野性に目ざめるようになる。

しかしながらこれらの年月のあと、彼女の断固とした性質には、彼女のマレー人の親戚によって示される兇暴で妥協しない目的の誠実さが、彼女が不幸にして接触した白人の、口先のうまい偽善や丁寧そうな見せかけや美德のある口実よりも、けっきょく好ましいものにみえた。けっきょくそれが彼女の人生であった。それが彼女の人生になるはずであった。そしてそう考えて、彼女はより一層母の影響力の下に落ちていった<sup>⑧</sup>。

すなわち彼女はマレー人の母からうけ継いだ野性と、白人の父によって与えられた文明の二面をもっているわけだ、ルーセル (Royal Roussel) は「この小説を通じて、彼女はこのヨーロッパ的な世界とマレー的世界の間の緊張の焦点に立っている。『オールメイヤーの阿房宮』はオールメイヤーの幻滅の物語であるが、それは彼女のこれら二つの性質の間の究極的選択から起る幻滅である。それ故に彼の没落の論理を理解することは、一方では父とシンガポールの世界に代表される力と、他方は母とデインによって代表される力との間の、選択の根本理由を理解することである<sup>⑨</sup>」と指摘している。けっきょく彼女はこの選択において後者を選ぶのである。そして彼女をアムステルダムへ連れかえって、豪華な生活を共にしようというオールメイヤーのこの世での唯一の願望をうちくたくことになるのだ。しかし見方を変えれば、オールメイヤーにとってニーナは、「彼が代って自分の野

心を成就することのできる道具<sup>⑧</sup>」に外ならず、彼女はその束縛から自由になろうとする捕虜であるとみなすこともできる。ニーナにとって父の願望に従うことは、自分の自由を束縛することになるのだ。いずれにせよ、娘を文明人として白人仲間に入れようとする父と、血のままに野性に従おうとする娘との間の葛藤こそ、この作品の悲劇の本質である。

オールメイヤーは孤独である。彼が杖とも柱とも頼むリングガード船長は、財宝を求めての航海に出たまま帰って来ない。周囲は隙あらば彼を陥れようと待ちかまえているマレー人やアラブ人ばかりである。彼は妻さえ信ずることができない。彼に信じられるのはニーナだけなのである。しかしそのニーナにも最後はうらぎられる。コンラッドの作品にはこの外にも人間の孤独をテーマにしたものが多い。『エイミー・フォスター』(Amy Foster)は難船して異国に流れついた船乗りが、誰にも理解されず、結婚した妻とも言葉さえ通じぬ孤独のうちに死ぬ悲劇を描いたものであるし、『明日』(Tomorrow)という短篇は海へ出ていった息子を、明日は帰ってくる明日は帰ってくると言って、毎日待ちくらくらしている老父の孤独を描いたものである。オールメイヤーが孤独であるだけに、娘にうらぎられる彼の悲劇性が痛切なものとなるのである。

ところでニーナが父をうらぎる原因となるのは、デイン(Dain Maroola)というマレー人の若者の登場である。彼は南海のひとつの島の酋長の息子で、やがて酋長の位につくべき血統正しい青年である。デインとニーナの出会いは『島の流れ者』におけるウィレムズとアイーサ(Aissa)の出会いと同様に、宿命的で不可避的である。ニーナはデインを一目見るや彼に宿命的な結びつきを感じ、恋に落ちる。

彼女は歓ばしい恐怖のスリルをもって、自分が不思議にもその人間と同じだという意識を認めた。彼の言葉を聴いていると、彼女は自分がその時はじめて新しい存在の認識をもって生まれたのだ、自分の人生は彼の近くにいる時のみ完全なのだ、

というように思われた。そして彼女は半ばヴェールにおおわれた顔で、黙って、マレー娘に似つかわしいように、夢みるような幸福の感情へ身をゆだねていった。彼女は文明化された自己規制のどんな影響によっても全く拘束されない男の、抑制されざる熱狂で、彼の天性が生むことのできるひめられた愛情と情熱を彼女に与える、デインの言葉に耳を傾けた。<sup>⑩</sup>

ではこのように不可避的に二人の心を結びつけたものは何か？ それは二人は同じだという種族の意識と、他の誰にもわからないが二人の間にも通う、相互理解の意識に外ならない。デインが白人世界の自己規制によっても全く拘束されない言葉で語る時、ニーナはその時はじめて新しい存在に目ざめたと感じるのだ。ルーセルは「オールメイヤーが西洋の文明化され抑制された世界を語るに對し、デインはニーナが母からうけ継いだかくれた野性に訴える」といい、二人の同一性の不思議な意識は「彼らの二つの野性的性格の間に通う微妙な相互理解<sup>⑪</sup>」の上にならたてられると述べている。すなわちこれはマレー人の血が血を求めあい、野性の本能が互いを引きつけあう原初的な結びつきなのだ。そこには理性の抑制も打算もない。本能と本能の結びつきがあるのみなのだ。デインは「文明化された自己規制の影響に全くとらわれない人間の、すべての抑制されない熱狂をもって」<sup>⑫</sup>生きている。従って彼は「統制する感情への抑制なく」<sup>⑬</sup>恋に没入できるのである。彼はニーナに向って「俺は俺の魂を永遠に貴女の両手に委ねた<sup>⑭</sup>」<sup>⑮</sup>と言い、「俺は貴女の呼吸とともに呼吸し、貴女の見、貴女の頭で考え、貴女を永遠に俺の心に受けいれる<sup>⑯</sup>」<sup>⑰</sup>と言う。このように激しい原初的な結びつきの前には、オールメイヤーの娘に對する愛情などもろくも破れ去るのは当然といえよう。

二人にとってはその時せまきもろい船の船べりの外には何もなかった。それは彼らの世界であり、彼らの強烈ですべてを吸収する愛に充たされていた。彼らは濃くなる霧も日の出の前に消えてゆく微風をも気になかなかつた。彼らは彼らを取巻

く大きな森や、蔽爾で印象的な沈黙の中で太陽の出現を待っている、すべての熱帯の自然の存在を忘れた。<sup>⑰</sup>

二人にとっては二人だけの愛の世界があるだけで、その他のものは全く眼中にないのだ。ルーセルが『オールメイヤーの阿房宮』はこの相互の屈従によって、二人の人間が奇蹟的な連続性を成就し、自己と他者の区別が消えてしまう実存に入ることができるところを約束しているように思われる<sup>⑱</sup>と述べているのは、この二人だけの世界を指すものと考えられる。

ところでデインは火薬を密輸した罪でオランダ軍の追跡をうけているが、ある激しい洪水の夜に身がわりを川で溺死させ、死んだとみせかけてブランギ(Brangi)の隠れ家へ逃れる。そしてオールメイヤーの妻はババラッチと謀ってデインとニーナをひそかに逃がそうとする。オールメイヤーの妻はニーナに、カメラでデインのもとへ行き、いっしょに彼の故郷の島へ逃げるように次に説得する。

「お前の古い人生は棄てるのだ！ 忘れるのだ！」と彼女は懇願する調子で言った。「お前がかつて白人の顔を見たことを忘れるのだ。彼らの言葉を忘れるのだ。彼らの考えを忘れるんだ。彼らは嘘をつく。そして彼らは、彼らよりもすぐれているが強い私達を軽蔑しているから、嘘を考えるのだ。彼らの友情と軽蔑を忘れておしまい。彼らの多くの神を忘れておしまい。娘よ、なぜお前は過去を想い出す必要があるのだ？ お前の微笑一つのために多くの命を——自分の命をささげようという、戦士であり酋長である男がいるというのに。」<sup>⑲</sup>

彼女は白人に対する敵意と侮蔑をむきだしにして、娘に過去を、白人の世界を棄て、お前を待っているたくましい恋人の胸に跳びこんでゆけと説く。白人の世界と縁をきるように命じるのだ。そしてそれは父であるオールメイヤーを見ずすることを意味する。ニーナは眠っている父の顔を一目みようかと一瞬ためらうが、その気持を

ふりすててデインの待つ場所へカヌーで乗りだす。

父の顔をもう一度見たいという束の間の願いの下には強い愛情はなかった。彼女はその自分に対する感情を理解できない、見ることすらできない男のもとを突然去ることに、なんらの躊躇も悔恨も感じなかった。<sup>②</sup>

究極的に父と娘との間には愛情も理解もないのだ。オールメイヤーはニーナの感情を理解できないのだ。かくて父を見ずることによってニーナはすべての過去を棄て、「新しい存在の意識」に目ざめるのである。ルーセルは「闇の力はひじょうに確かな原理だから、ニーナが父よりデインを、文明より原始を選ぶのは事実死より生を選ぶことであり、彼らがサンバーから逃げた後彼らに生まれる子供は、ニーナの決心の最後の認可である」と述べている。

ニーナは父の自分に対する感情を理解できないという。これは白人の世界とマレー人の世界が、まったく意思の通いあわぬ異質のものであることを意味する。ニーナはオールメイヤーに、二つの世界が対立することを次のように説明する。

「あなたは昨日わたしがあなたのわたしに対する愛を理解し、見ることができないと仰った。そのとおりです。どうしてわたしに理解できません。二人の人間は互いを理解しません。彼らは彼らの声だけを理解できるのです。あなたはわたしにあなたの夢を夢み、あなたの幻をみるよう求められました。……しかしあなたがしゃべっている間、わたしはわたし自身の声に耳傾けていました。それからこの人が来ました。そしてすべては静かでした。彼の愛の囁きだけがありました。……そのうちに……わたしたちの声、あの人とわたしの声は、わたしたちの耳にのみ理解できる甘美さでいっしょに語りました。あなたはその時黄金のことを語っていました。しかしわたしたちの耳は、わたしたちの愛の歌で充たされていました。

……それからわたしは、わたしたちが互いの目とおして見ることができずに気がきました。彼は彼とわたし以外の者を見ることのできないものを見ることに。わたしたちは誰もついて来ない土地に入ったのです。……それからわたしは生かされたのです。」

これでわかるように、親子は完全に別の世界に住んでいる。オールメイヤーは黄金と豪華な暮しを夢み、娘も同じ願望をもっていると思われているが、ニーナは全く別の事を夢みている。ニーナはオールメイヤーの血を半分受けた混血娘だが、住んでいる世界は完全なマレー人のそれと変りがない。彼女はこれまで全く異なる両親（“those two beings so dissimilar, so antagonistic”）の間に立って生きて来た。そして父の夢は全然理解できないのに、野性的な母の言葉には彼女の本能的意識に訴える何かがあったのである。

彼女は父の夢はほとんど信じられず、全然同情をもたなかった。しかし母の狂暴なたわ言は、たまたま彼女の絶望する心のどこか深い底で、反応する心の弦をうったのだ。そして彼女は彼の牢獄の壁の中で自由を夢みる捕虜の執拗な放心で、自分の夢を夢みただけである。デインが来るとともに、彼女は新しく生まれた衝動の声に従うことによって、自由への道を見出し、驚きの歓びをもって彼の目に、彼女の心のすべての疑問に対する答えをよむことができると思っただけである。今や彼女は人生の理由と目的を理解した。そしてその神秘が意気たからかにヴェールをはぎとられるにつれて、彼女は悲しい思い、苦い感情、かすかな愛情のある彼女の過去を、軽蔑をもって棄て去ったのだ。その過去は彼女の激しい情熱との接触により、今はしなびて死んでいた。

ニーナがデインと行動を共にすることは、マレー人としての本能に忠実に従うことであり、父のもとを去ることとは牢獄より解放されることなのである。彼女にとって、父との生活はしなびた過去に外ならず、彼女はその過去を棄て去ったのである。

折から娘の行動を知ってボートでかけつけたオールメイヤーは、ニーナに思いとどまるよう必死に訴える。「お前がその男についてゆけば、けっきょく彼のもてあそび物になり、最後は奴隷にされてしまうのだ」と説いて、彼女の行為の愚かさを教えて聞かせる。しかしニーナには、この忠告は何の効きめもない。彼女は「わたしはあなたの人種ではありません。あなたの人々とわたしの間には、何物をもってしても取りのぞくことのできない障壁があります。あなたはわたしが何故行きたがるかと訊きますが、わたしは何故留まらなければならぬかとあなたに訊きます」と言い、ついには「わたしはマレー人です」と叫んで、デインといっしょに去ってしまう。オールメイヤーは絶望の叫びで娘を呼ぶが、空しい。激怒と絶望にうちひしがれて、オールメイヤーは叫ぶ。

「ニーナ、わたしはお前を許さないぞ。決してな。今お前がわしのもとへ帰ってきてても、今夜の記憶は一生わしを毒するだろう。わしは忘れるように努めよう。わしには娘はない。」

そして彼は砂の上に膝をついて、ニーナの残した足跡をひとつひとつ残さず消してしまふのである。この象徴的ジエスチャーによって、最愛の娘にうらぎられた彼の失意と怒りが、いかに大きいかを想像することができる。彼はニーナの足跡をひとつ残さず消すことによって、彼の意識から彼女の存在を抹殺したのである。これからは「許さない」というのが彼の口ぐせになる。

「ニーナ、わたしはお前を許さないぞ」とオールメイヤーは無感動な声で言った。「わしがお前の幸福を夢みているのに、お前はわしの心を引きちぎった。お前はわしを欺いたのだ。」

コンラッドは失意のどん底にあるオールメイヤーの表情を次のように描いている。

その顔は空虚であった。情緒、感情、理性、その知識のしるしさえなかった。すべての感情、悔恨、悲哀、希望、怒り、すべてが消え、運命の手によって消し去られていた。この最後のひと消しのあとにはあらゆるものが終って、記録する必要がないかのように。彼の生涯の残りの短い間にオールメイヤーを見た者は、つねにその中で起っていることを全然知らないように見える、その顔の様に印象を受けた。それは冷たい無関心なモルタルと石の中に、罪、悔恨、苦痛、浪費された人生を包んでいる牢獄の空虚な壁のようであった。<sup>②</sup>

生きる氣力をなくしたオールメイヤーの空虚さが実にみごとに表現されているではないか。ニーナを失った彼には、この世に何も残っていなかったのである。あるのは空虚であり無感動、無氣力であった。

オールメイヤーにとっては「彼女への信頼こそ彼の希望の土台であり、彼の勇氣の動機であり、生き、闘い、そして彼女のために勝つ彼の決心の動機であった」<sup>③</sup>のだ。その信頼が「彼女の手によって残酷に、卑劣に破壊された」<sup>④</sup>のだ。オールメイヤーは富と榮達のみを追いもとめる俗物であるが、彼が娘の幸福を願った親としての愛情は否定しがたい。そして彼が孤立無援の孤独な立場にあっただけに、彼のかけた唯一の期待と信頼をうらぎられた絶望と失意は理解できるし、哀れを感じさせるのである。しかしオールメイヤーとニーナはしよせん理解しあえぬ別の世界に住んでいたのであり、人間の孤独さを痛切に感じさせる。そしてこの場合親は白人であり娘はマレー人であったという文明と原始の対立にこの作品の悲劇の特異性があるといえる。

ニーナの去った後のオールメイヤーの阿房宮は次のようであった。

死んで去った者の土くれと骨。彼はこれらの物すべて、何度も征服された何年もの労働、闘争、倦怠、失望のあとに残されたすべてを眺めた。そしてすべて何のために？<sup>⑤</sup>

そしてオールメイヤーは次第に生きる氣力を失い、阿片におぼれて死んでゆく。

以上述べてきたように、全く異なる二つの世界に住む親子の断絶が、この作品の悲劇を構成している。父は物質的幸福のみを人生で最大のものと考え、最愛の娘のためにその実現をひたすら願う。しかし恋人との愛の生活をすべてと考える娘にとっては、父の願望は自分の自由をしばる拘束に外ならない。当然の結果として娘は父を棄てて恋人に走る。こうした親子の断絶は我々の周囲にもしばしば見られるもので、さほど珍しくはない。ところがこの作品の場合には、父は白人なのに対し母はマレー人で、両者の間には敵意と反感しかなく、両者は全く対立する世界に住むという特異性がある。そしてその間に生まれた混血の娘は、父に従うか母につくか存在の選択をせまられる。それ故に母が娘に説いて父を棄てさせ、恋人に走らせるというような特殊な状況を生ずるのである。この特殊性は白人対マレー人、文明対原始の対立によって生ずるもので、ここにこの作品の特色があるといえる。

人種の対立は血の意識の対立を意味する。オールメイヤーの代表する白人と、ニーナ、デイン、オールメイヤーの妻の代表するマレー人では、人生の価値観が全く異なる。オールメイヤーは物質的利益のみを追いもとめるが、マレー人にとって白人の世界は、エゴイズムと物欲と虚飾にみちた醜悪なものとし映じない。それは両種族の体内を流れる血と、その意識としての本能の違いを意味する。この違いは何物をもってしても埋めることができない。オールメイヤーがいかに物質的幸福のすばらしさを説いても一向ニーナの耳に入らず、むしろ野蛮な母のたわ言の方が心の琴線に触れるのはそのためなのだ。そしてマレー人としてのニーナの血の意識に最もつく訴えるのはデインとの恋である。二人の恋はマレー人としての血が血を求めあう根元的なものである。ニーナが白人の父を棄て、マレー人の恋人のもとへ走ることは、彼女が自由の拘束を脱し、マレー人としての眞の生き

方に従うことなのだ。本然の人生を生きることなのだ。

しかし物質欲にかたまり、白人の世界こそ最もすばらしい世界だと信じて疑わぬオールメイヤーに、どうしてこのような娘の感情を理解することができよう。彼がニーナに信頼をうらぎられたと感じ、彼女を許さないぞと叫ぶのももっともである。ニーナの去ったあとと彼が砂浜に跪いて、彼女の足跡をひとつまたひとつと残らず消していくシーンは、彼の絶望と怒りを象徴して印象ふかい。二人のふかい断絶がこのジェスチャーに象徴されているように思われる。

最後にコンラッドがこの作品の背景をマレーの風土に置いたことの意義に、もう一度注目しなければならない。この文明から隔絶された熱帯の土地は、この作品の舞台として最もふさわしい。なぜならばこの土地こそ、原始と文明との闘いを文字どおり示しているからである。オールメイヤーをめぐる悲劇はこのマレーの荒々しい風土と渾然と一体になっている。

注

- ① Joseph Conrad : *Almayer's Folly and Tales of Unrest* (Collected Edition of the Works of Joseph Conrad, Dent), p. 19.
- ② Albert J. Guerard : *Conrad the Novelist*, p. 71.
- ③ *Ibid.*, p. 72.
- ④ Hugh Walpole : *Joseph Conrad*, p. 56.
- ⑤ Daniel R. Schwarz : *Conrad : Almayer's Folly to Under Western Eyes*, p. 4.
- ⑥ Albert J. Guerard : *Conrad the Novelist*, p. 71.
- ⑦ Joseph Conrad : *Almayer's Folly and Tales of Unrest*, p. 72.
- ⑧ *Ibid.*, p. 43.

- ㊦ Royal Roussel : *The Metaphysics of Darkness*, p. 38.
- ㊧ *Ibid.*, p. 39.
- ㊨ Joseph Conrad : *Almayer's Folly and Tales of Unrest*, p. 64.
- ㊩ Royal Roussel : *The Metaphysics of Darkness*, p. 39.
- ㊪ *Ibid.*, p. 39.
- ㊫ Joseph Conrad : *Almayer's Folly and Tales of Unrest*, p. 64.
- ㊬ *Ibid.*, p. 69.
- ㊭ *Ibid.*, p. 178.
- ㊮ *Ibid.*, p. 69.
- ㊯ Royal Roussel : *The Metaphysics of Darkness*, pp. 40—41.
- ㊰ Joseph Conrad : *Almayer's Folly and Tales of Unrest*, pp. 150—151.
- ㊱ *Ibid.*, p. 151.
- ㊲ Royal Roussel : *The Metaphysics of Darkness*, pp. 41—42.
- ㊳ Joseph Conrad : *Almayer's Folly and Tales of Unrest*, p. 179.
- ㊴ *Ibid.*, pp. 151—2.
- ㊵ *Ibid.*, p. 179.
- ㊶ *Ibid.*, p. 180.
- ㊷ *Ibid.*, p. 184.
- ㊸ *Ibid.*, p. 189.
- ㊹ *Ibid.*, p. 190.
- ㊺ *Ibid.*, p. 192.
- ㊻ *Ibid.*, p. 199.